

## 2020年2月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

500hPa 高度をみると、中央シベリア～日本付近、北太平洋中緯度帯の東部、北大西洋の北緯40度帯～ヨーロッパ南部で正偏差、北極域の広い範囲で負偏差となった。北太平洋中緯度帯の東部～カリブ海諸国、グリーンランド～北アフリカ～東アジア南部において、波列パターンが見られた。200hPa 風速をみると、偏西風は、北大西洋では平年よりも強く、日本の東海上～北太平洋東部においては平年の位置と比べて北寄りを流れた。海面気圧をみると、南アジア北部、日本付近、米国の西海上、北アフリカで正偏差、北極域の広い範囲で負偏差だった。アリューシャン低気圧は、アリューシャン近海で平年よりも強かった。850hPa 気温をみると、北大西洋の北緯40度帯～中央シベリア～日本付近、米国の西海上で高温偏差、チュクチ海、グリーンランドの南海上及び北東海上で低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、インド洋赤道域の西部、太平洋赤道域の日付変更線付近、北太平洋熱帯域中部の北緯10度帯で活発、インドネシア付近、南米北部で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、インドネシア付近～太平洋～アフリカを東進したとみられるが、振幅は小さかった。対流圏上層では、北アフリカ、中国南部付近、北太平洋熱帯域の中・東部、北大西洋熱帯域の西部で低気圧性循環偏差、アラビア海、南インド洋熱帯域の中部で高気圧性

循環偏差となった。対流圏下層では、太平洋熱帯域の日付変更線の西で南北半球対の低気圧性循環偏差、東南アジア付近で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。海面気圧は、赤道域では、日付変更線付近～太平洋中部を除いて正偏差となった。南方振動指数は0.0だった。

### 世界の天候

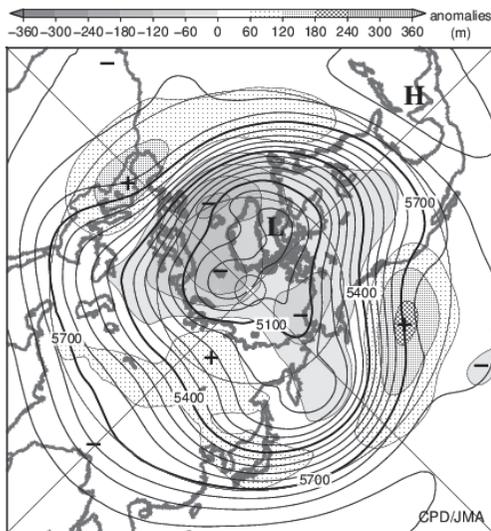
世界の月平均気温偏差は+0.57°C（速報値）で、1891年の統計開始以降、2月として2番目に高い値となった。2月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.82°C/100年（速報値）である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

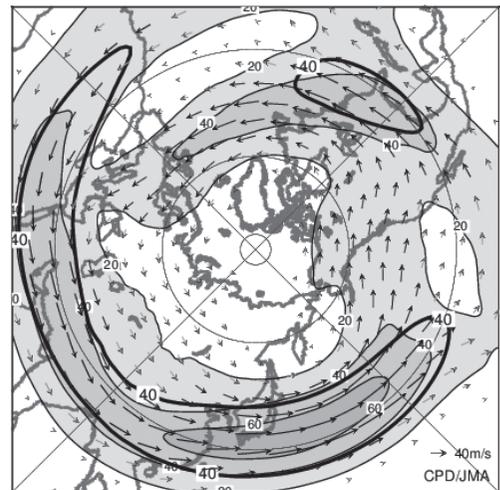
- 東日本～中国中部、西シベリア中部～中央アジア北西部、ヨーロッパ中部～北アフリカ北西部、オーストラリア北東部～東南アジア南部で異常高温となった。
- 中国北東部～中央アジア中部、ロシア北西部～ヨーロッパ北西部で異常多雨、ヨーロッパ南部～北アフリカ北西部で異常少雨となった。

（気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課）

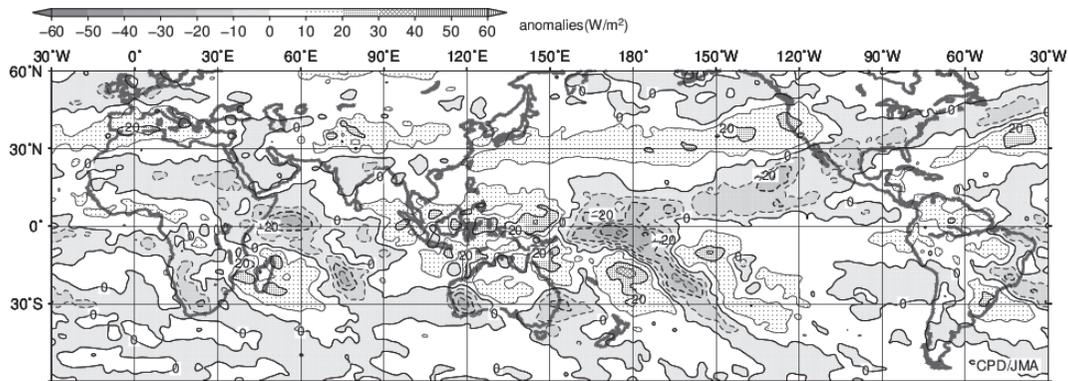
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。  
<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



2020年2月の北半球月平均500hPa 高度及び  
 平年偏差  
 等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は  
 1981～2010年の平均値。

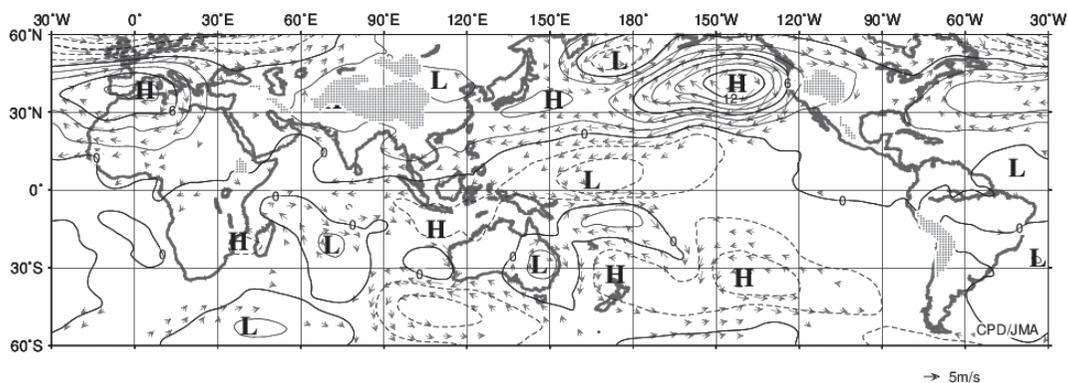


2020年2月の北半球月平均200hPa 風速及び  
 風ベクトル  
 等値線間隔は20m/s。太実線は平年の風速で等値  
 線間隔は40m/s。平年値は1981～2010年の平均値。



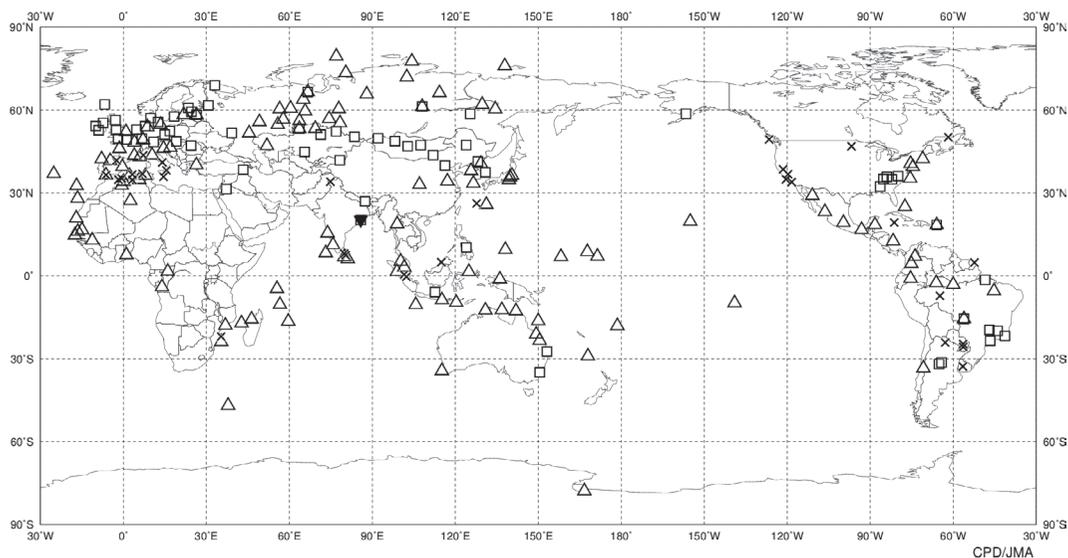
2020年2月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は $10\text{W/m}^2$ で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。平年値は1981~2010年の平均値。



2020年2月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 。平年値は1981~2010年の平均値。



2020年2月の世界の異常天候分布図

△異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨  
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。